

大阪中学校選手権 (7/23・24 万博) RESULTS

<共通男子の部>

200m 堤 24:17 (+0.8) <準決勝> 23:46 (-0.2)

<決勝> 23:52 (+2.0) 7位

3000m 福田 10:28:00

低学年4×100mR (岩下・三浦拓・伊藤・白石) 49:05

<準決勝> (岩下・三浦拓・伊藤・白石) 48:48

<決勝> (岩下・三浦拓・伊藤・白石) 48:47 5位

共通4×100mR (高須賀・堤・藤井翔・掛川) 51:61

走り高跳び 金川 1m65

走り幅跳び 藤井翔 5m68 (0)

三段跳び 榎本 11m54 (+0.2) 掛川 11m08 (0)

砲丸投げ (5kg) 東山 NM

円盤投げ (1.5kg) 高須賀 26m23

<共通女子の部>

100m 山本祐 13:09 (-1.7) 西尾 12:67 (-2.6)

<準決勝> 山本祐 12:88 (0) 西尾 12:49 (0)

<決勝> 西尾 12:39 2位 山本祐 12:68 5位 (+1.8)

200m 立石 28:34 (-2.0) 金子 27:71 (-2.2)

<準決勝> 金子 27:98 (-1.3)

1500m 前田 4:48:26 <決勝> 4:42:80 3位 近畿大会出場決定

低学年4×100mR (村上・伊東・緒方・山元) DSQ2→3

共通4×100mR (金子・山本祐・立石・西尾) 49:20

<準決勝> (金子・山本祐・立石・西尾) 48:94

<決勝> (金子・山本祐・立石・西尾) 48:28 1位 大阪中学新記録

全国大会・近畿大会出場決定

走り高跳び 内村 1m48 木下 1m45 <決勝> 内村 1m45

走り幅跳び 福島 4m89 (-0.9) <決勝> 4m96 (-0.2)

砲丸投げ (2.7kg) 秋澤 NM

円盤投げ (1kg) 中村 NM 佐々木 27m25 <決勝> 佐々木 26m88 8位

四種競技 岡本 1999点

100JH 16:91 (+0.7) 607点 走高跳 1m40 512点 512点

砲丸投 8m24 415点 200m 30:24 (+1.3) 465点

<女子総合の部>

1位 咲くやこの花 34点 **2位 東雲 26点** 3位 淀川 17点

<女子トラックの部>

1位 咲くやこの花 26点 2位 東雲 25点 3位 薫英女学院 15点

東雲共通女子リレーチーム、48秒28（大阪中学新記録）

で連覇！4度目の全国大会大阪府代表に！！

今年も「風を詠み、明日にときめき、夢を賭ける」大勝負の日がやって来た。大阪中学選手権初日の最終種目。5時45分。高らかに音楽が流れて、「本日最後の決勝種目。共通女子4×100mリレー決勝であります。このレースで優勝したチームが全国大会出場が決まります。」とアナウンサーが興奮ぎみに伝える。昨年以上の激戦となった。4レーンに東雲、5レーンに咲くやこの花、6レーンに登美丘。東雲は6月末の大阪選手権で高校生・大学生のチームとともに走り、48秒92の記録を持っているものの、先の前哨戦となる通信大会では東雲49秒13、咲くやこの花49秒29、登美丘49秒69と僅差のハイレベルな勝負を繰り広げている。「4レーンは東雲」のアナウンスで、メインスタンドに陣取る東雲応援団から「しのめ〜」と、大きな声援が飛ぶ。第1走者の金子は小柄な体が大きく見えるほど平然としていて、自分の集中モードを高めるためのルーティンを繰り返している。



眠れぬ夜を過ごし、朝から落ち着かない自分にあきれかえっている。いい歳をして、何度経験しても落ち着かないのだ。予選は3組8レーンに東雲。「一番外側のレーンは自分のレーンに集中しやすいよ」と言って選手たちを送り出している。バトンが渡る度に胸が張り裂けるような思いをしているうちに、アンカーの西尾がフィニッシュラインを駆け抜けた。49秒20の速報に胸をなでおろした。おそらく予選の史上最高タイムである。順調である。自分の調整が間違っていないことを確信した。それでも何が起こるのかわからないのが、リレーの怖さである。実は決勝を迎えるまで、「他校の記録や順位に惑わされず、いかにして自分たちのリレーをやりきるかということに集中しなさい。」と選手に言い渡していた。自分も咲くやこの花や登美丘の予選のタイムをチェックしていないし、きっと選手も（ライバル校の）記録を知らないはずだ。準決勝は2組。5レーンに東雲が登場。西尾がフィニッシュラインを駆け抜けると、速報のデジタルタイマーの数字が『48：94』で止まると、競技場全体がどよめいた。今シーズン2度目の48秒台。準決勝で48秒台もおそらく史上最速タイムとなる。昨年の全国大会で優勝したときの岡山県の吉備中学が優勝したときのタイムが48秒97で、この記録を上回っているのだ。決勝までわずかに1時間45分。選手たちは30



分ほどアイシングをした後に、イメージトレーニングでリハーサルしたとおりに選手招集場所に向かい、今回は補欠にまわった福島を入れた5人で円陣をつくり、大きな声で絆を確認しハイタッチしながらそれぞれ現地に向かっているはずだ。選手たちの方が間違いなく冷静である。



運命のピストルが鳴った。8人の走者が夢に向かってきれいにスタートを切る。金子の高速ピッチが冴え渡るが、登美丘、咲くやこの花の第1走者と接戦である。第2走者の山本祐莉がスタートを切る。金子がややバトンを長く持っているように見えたが、それはブルーゾーン内でバトンが渡って失格にならないようにしているため。2人の呼吸はぴったりで、祐莉がテイクオーバーゾーン内に入るとすぐに祐莉の左手にバトンが渡った。祐莉はバトンを受け取ると、これまた持ち前の鋭いピッチでバックストレートを走り抜ける。それでも接戦である。バトンは第3走者の立石へ。咲くやこの花のエース池田選手が猛スピードで曲走路を走りわずかに前に出る。真っ先に第4走者の咲くやこの花のアンカー

にバトンが渡る。そのすぐあとほとんど同時に東雲と登美丘。確実に西尾にバトンが渡ることを見届けると、心の中で「よっしゃー」と叫んだように思う。アンカーの西尾の走りには絶対的な信頼を寄せているのだ。中盤あたり手前で咲くやこの花のアンカーをとらえると、大きなストライドでぐんぐん前に出る。最後は独走でフィニッシュラインを駆け抜けた。速報のデジタルタイマーの数字が『48:26』で止まると、競技場全体に衝撃が走った。正式計時は48秒28に訂正されたが、これまでの大阪中学記録48秒83（2009年石切中）を大きく上回る大阪中学新記録の誕生となった。しかも、日本中学歴代8位。そして今年度中学ランキングトップの大記録である。さらに驚くべきことがある。2位の咲くやこの花の記録も48秒94で昨年日本一のタイムを上回る。3位の登美丘のタイムが49秒01。日本で史上最高レベルの決勝になったかも知れない。多くの先生に祝福される度に頭を下げたが、「鳥肌が立ったままおさまりません。信じられないレースです。」と、同じ台詞を何度も言われた。48秒台を出しても全国大会に出場できない時代がこんなに早く訪れるとは思わなかった。



4人が駆け寄ってきた。笑顔であるが大粒の涙を流している。「やったね。素晴らしいリレーをここ一番でやりきったね。それにしてもここまで記録が伸びるとは…。」と声をかけたがあとは言葉にならない。ひとりずつハイタッチを交わした。嬉

しさと感動が入り混じった美しい涙であるが、極限の緊張状態から解放された涙でもあると感じた。4人の選手のところへ補欠の福島が合流した。彼女は泣きじゃくりながら、4人を祝福していた。止まらない涙が、彼女もまた同じ戦いを繰り広げていたことを証明していた。

表彰式が始まった。スタンド最前列には東雲の選手のほかに、応援に来てくださった校長先生、教頭先生、保護者OB、OGがカメラやビデオを片手に「おめでとう」の祝福の声。「先生！」と呼び止められると、そこには東雲OGの岡田萌と大泉萌の2人が笑顔で手を振っている。



決して忘れてはならない物語がある。

～奈良の鴻ノ池陸上競技場で開かれた昨年の全国大会。兵庫県井吹台中、静岡浜松天竜中とともに優勝候補の3強として、持ちタイム48秒84の記録で現地入りした東雲中。準決勝で当時1年生の山本祐莉に第3走者の座を譲った3年生の大泉萌やん。それでも萌やんは「チームで戦っていることだから」と自分に言い聞かせ、ひとことも愚痴をこぼさずチームのために献身的にサポートしてくれた。ところが、迎えた準決勝ではバトンがあわずに敗退してしまった。そして大会最終日のファイナル、リレーの決勝。48秒97のチーム新記録で日本一の歓喜に湧く岡山県吉備中の選手たちを見て、はじめてそこで萌やんが泣いた。他の選手たちの頬にも涙がつた。リレーの決勝が終わるそのときまで、彼女はずっと心の中で戦っていたのだ。～

大会初日、朝一番に4人の選手と顔を合わせたときに、真っ先にこの話をした。「1年前に、『来年の千葉全中で日本一になる』ことを誓ったはずだ。萌や萌やんのためにも、まずは今日勝たなければならない。あのときの萌やんの涙を決して忘れてはならない」5人のメンバーは力強く「はい」と返事をした。この話はどうしても朝一番に伝えなければならないと思っていたのだ。

大きな大きな勝負であったが、彼女たちは今日が夢の折り返し点であることは百も承知しているはずだ。日本ランキングトップで迎える全国大会となるが、そんなことはどうでもいい。東雲らしく明るく元気に、自分たちのリレーに徹することのみに集中していきたい。



前田、女子1500mで2大会連続の3位入賞！

標準記録突破ならずとも、近畿大会出場を決める！！

先の通信大会で4分38秒00の全国大会参加標準記録にわずか100分の74秒足らずに悔し涙を流した前田。この選手権に賭ける意気込みは並々ならぬ決意を秘めていたはずだ。通信大会と違って、学校対校戦でもあるこの選手権大会は予選では各組に有力選手が振り分けられることになる。予選は無理をせずに着取りで決勝進出を決めて、2日目の決勝で標準記録突破と、3位までに与えられる近畿大会出場権を獲得することを目標に調整を重ねてきた。

大会初日15時25分。共通女子1500m予選3組、各組の4着までとそれ以外の記録上位者3名が決勝進出となる。その1組に前田が登場。予選であるにもかかわらず、比較的ハイペースで進む展開となったが、それでも前田は落ち着いて先頭付近をキープ。最後の直線は余裕を持って3着でフィニッシュ。4分48秒26のタイムで予定どおりに決勝進出を決めた。

大会2日目。13時25分共通女子1500m決勝。大阪長距離女王を目指して15人のファイナリストが勢揃いした。すでに全国大会出場を決めている4人も含め、各選手の持ちタイムは大阪の史上最高レベルの決勝レースとなる。陸上の神様とお天道様が話し合っていて意地悪しているのか、この日になって暑さがかなりきびしくなった。今まで珍しく涼しい日々が続いていただけに今日の暑さがいつも以上にこたえるのだと思った。標準記録突破を狙い、速いレースを目指しているのだが、陸上の神様は速い選手ではなく、どんな状況下でも力を出し切る強い選手を選びたいらしい。夢に向かってピストルが鳴った。外側から前田がするすると前に出る。いつもどおりの積極的なレース展開となる。先頭は早くも去年の全中チャンピオンの高松望ムセンビ選手。すでに標準記録を突破している千里丘の渡辺選手が2番手。その3番手前後を前田。同じ地区の前田を引っ張るようすは「いっしょに全国に行きましょう!!」と言わんばかりの渡辺の熱い走りであった。400mを6

9秒で通過。照りつける陽射しに負けじと、それでも必死でハイペースを刻んでいく。800mを2分26秒あたりで通過。先頭を行く高松望ムセンビ選手が独走となるが、そのあとは前田と妹の高松智美ムセンビ選手、渡辺選手、天王の奥川選手、吹田一の三池選手らが集団。すべて三島地区の選手なので、地区大会から何度も見る光景である。ラスト1周の鐘が鳴って1200mを3分42～3秒で通過。暑さでサバイバルレースとなり、



ひとりひとり選手が落ちていく。苦しい表情ではあるが、前田の瞳はそれでもまっすぐ前を見ていた。最後のホームストレート。先頭の望ムセンビ。20mほど離れて高松智美ムセンビ選手、前田、そして奥川選手。めまぐるしく変わる速報のデジタルタイマーが恨めしかった。高松望ムセンビ選手が1着。4分24秒38。高松智美ムセンビ選手と前田が立て続けにフィニッシュ。奥川選手の追い上げを何とかかわした。2着高松智美ムセンビ選手42秒69、3着前田42秒80、4着奥川選手43秒56、5着渡辺選手46秒46。近畿大会出場を決めたものの、まともや全国大会参加標準記録突破ならず…。

フィニッシュして倒れこんだ前田が号泣した。激しく息をしながら立ちあがれない。何とかトラックの外側に移動させたものの、まだ倒れて動けない。息を吞んで静かに見守る東雲女子中長パートのメンバーたち。実はトラックの決勝種目が終わると、場内指令の審判が上位3位までの選手を表彰の控え室に連れていくことになっている。嗚咽（おえつ）が止まらない前田の姿を審判までもが見守っている。「すみません…」と言うと、「先生、（表彰が少々遅れてもかまわないので）そっとしてやってください」と、静かに答えてくださった。陸上に夢を賭けて打ちこんだものなら、誰でもこの前田の姿を見て感じることもあるでしょう。勝者の涙に負けなくらい、夢に向かって挑戦し続けた敗者の涙もまた純粹で美しい。

ウォーターボーイズの軽やかな音楽に流れて3人の大阪代表選手が表彰台に上がった。3人の顔ぶれは先の通信大会とまったく同じ。前田は全国大会参加標準記録を上回ることはなかったが、2大会連続で予選、決勝を通じて上位を占めたのがこの3人なのだ。そういう意味で前田は堂々と胸を張るべきだ。それを知ってか知らずかみんなの祝福と拍手にはにかみながら笑顔を見せる前田。自分も彼女の健闘に心から拍手を送った。近畿大会では東雲の総合2連覇を目指すためにも、この種目で入賞することが次なる目標となる。



今年も100mファイナリストに東雲ブルーの2人

山本祐莉、惜しくも全国大会出場を逃す…。

大会2日目。もうひとつの大きな目標があった。選手権の初日までに、女子共通リレーが大阪中学新記録のおまけつきで2連覇して全国切符を予定どおりゲット。通信では西尾がこれまた予定どおりに100mと200mで標準記録を突破、3種目での全国大会出場を決めた。通信大会で向かい風0.7mの中、12秒60で優勝した山本祐莉は2年女子100mでの近畿大会代表選手を確定したものの、あと100分の5秒に迫った標準記録突破こそがその目標となるのだ。「前日の質の高いリレーの3本の走りがある分、疲れがないわけがない。予選は準決勝、決勝に向けていい走りをするための刺激と考えて走れ。選

手権は予選が着取りになるので後半流してもいいよ」と、西尾と祐莉の2人にアドバイスした。予選を迎えて、ホームストレートは強い向かい風になっていた。ここは記録が狙えないので、ますます着取りを意識すればいいのだ。4組7レーンの祐莉。フィニッシュライン手前で流したものの、13秒09。向かい風1, 7m。すべて予定どおり。ある意味、想定外の走りをしたのが次の組で走った西尾である。何と向かい風2, 6mで、12秒67。彼女の強さに舌を巻いた。

いよいよ勝負の準決勝を迎えた。ここから向かい風をきらってスプリント種目はすべてバックストレートでの逆走となった。準決勝は3組。各組2着までの選手とそれ以外の記録上位者2名が決勝進出となる。その準決勝1組4レーンに西尾。他を寄せつけない圧倒的な走りで12秒49、無風。いとも簡単に決勝進出を決めた。祐莉は3組5レーン、隣の4レーンには昨年のジュニアオリンピック優勝、先の通信大会で大阪中学タイ記録の12秒15の記録を持つ芝谷の川崎選手。カまずに川崎選手を追いかける走りをしたい。号砲一発、持ち前のスタートダッシュで40mくらいまでは川崎とイーブンの走りを見せる祐莉。そこから川崎の速い蹴り返しで祐莉が後ろに下がり、下がった分接地のタイミングが狂い少しずつ差が広がり2着でフィニッシュ。1着川崎12秒35, 2着祐莉12秒88。またしても無風であった。

14時15分。泣いても笑っても最後の決勝レースをバックストレートで迎えた。4レーンに西尾、5レーンに川崎選手、そして7レーンに祐莉。驚くことに、このスプリント最速女王を決めるこのファイナリスト8人の中に三島地区の選手が5人もいる。レーン紹介のときには腰に手をやり宙を見つめ、その後に髪をかき上げるいつものルーティンを繰り返す祐莉。運命のピストルが鳴る。スタートから持ち前のピッチでスピードを上げるが後半が思うように伸びない。真っ先に川崎選手がフィニッシュラインを駆け抜けて12秒23, そのあとに西尾で12秒39。祐莉は4着と100分の1秒の僅差で12秒68で5着。電光掲示板に自分の記録が表示されると祐莉は顔を覆って泣いた。追い風1, 8mの好条件だっただけに惜しまれるが、炎天下の2日間6本のレースはやはりきびしかったです。通信大会のときのように個人種目が初日であれば、突破できたかも知れない。それでも、ひとつ上の先輩の西尾は同じ条件の6本目で自己ベストの12秒39で走って



いるのだ。「今年はリレーにしぼりなさい」と、陸上の神様が示唆してくださったのだ。そして、今年の冬季で猛練習を重ねて、「来年こそは西尾のように1000mと200mの両種目で全国大会に出場できるような選手になりなさい」と、言ってくださっているに違いない。次なる個人の目標は近畿大会優勝、ジュニアオリンピックでの上位入賞、大阪選抜リ

レー代表選手になることである。毎日、継続した練習ができるようにして、今年中に12秒3台の記録を目指しましょう。そうすれば、来年100m大阪中学新記録が見えてくるはずだ。

男子低学年リレー、近畿大会出場に賭けた大勝負！

48秒47の東雲記録で惜しくも5位!!

男子低学年リレーで近畿大会出場を狙う野望があった。これまでの結果から佐井寺と咲くやこの花の強さが圧倒的であることは明白であった。3番目のイスを狙って楠葉、河南、豊中一との勝負となると見込んでいた。東雲にはエースはいない。1走から2年生の岩下、1年生の三浦、1年生の伊藤、2年生の白石のオーダーであるが、通信大会の2年100m、1年100mに伊藤を除く3人がそれぞれ出場しているがすべて予選落ちである。100mの記録の12秒14の岩下が最高タイムで1年生では三浦の13秒35が最高という平凡なチームである。それでもバトンを持つと走りが変わる東雲の伝統に賭けたのである。一番スピードのある岩下を第1走者に持って来るといふ攻めのオーダーを躊躇なく選択したのだ。予選は49秒05でその組の1着になり準決勝進出。準決勝では2組3着プラス2の条件の中、1組できわどく3着、48秒48のチーム新記録で決勝進出を決めたのである。

大会2日目15時20分。低学年男子リレー決勝。このレースに3位までに入れば、近畿大会出場が決まる。一番外側の8レーンに東雲。他チームを見ずに、前半からなりふり構わず飛ばしていきたい。一瞬の静寂の中、ピストルの閃光とともに8人の走者がいっせいにスタートを切った。岩下が思惑どおりにぐんぐん前が出る。体が熱くなった。岩下がスピード全開、第2走者の三浦もめいっばい加速してテイクオーバーゾーンの後半部分でスピードが上がったまま真っ先にバトンが渡ったのである。三浦はシードレーンのチームに追いつめられるが、それでも自分の走りを崩さない。スピードを落とすことなくバトンは第3走者の伊藤へ。第2曲走路になって、咲くやこの花と佐井寺が抜けてくるがあとは混戦。東雲のこれ以上ない展開となって、僅差とは言え3番目で第4走者の白石にバトンが渡る。白石もバトンを受け取ると最初からエンジン全開でスピードあげる。フィニッシュライン手前で河南と楠葉にとらえられるものの、48秒47のチーム新記録で5位入賞を決めた。近畿大会出場を逃す順位となったが、やるべきことをやりきった素晴らしいレースであったと総括できる。2大会連続で200mファイナリストになった堤が7位、この2種目で6点を獲得した。来年は男子リレーでさらなる進化をとげて、東雲男子チームのレベルをさらにあげていきたい。



感動とは気持ちが大きく動くこと！涙を流せるくらいに夢中になって打ち込めることは幸せなこと!!

男子200mに出場した堤が準決勝のきびしい戦いの中、自己新記録を出した。プラスで拾われて決勝進出。決勝でもキレのある走りを見せて、通信大会と合わせて2大会連続の大阪大会ファイナリストとなった。1年生の夏前まではテニス部だった選手。本人には失礼だが、昨年まではどこにでもいる普通の選手。この冬季練習で確かな力を身につけ、大きくブレイクした。リレーの第2走者としてのスケールの大きな走りを見れば、まだまだ伸びる選手。ただ、今回はそのリレーのバトンパスで初歩的なミスでバトンが落下。あえなく予選落ちしてしまったことは、大きな反省点となった。

女子円盤投げに出場した佐々木も予選で27m25の自己記録更新で決勝ラウンドに進出。決勝ラウンドでも26m88を投げ8位に食いこんだ。今年の瀧上に続いて、2大会連続で円盤投げで入賞したことになる。今の佐々木があるのは、当時2年生だった佐々木にやさしく、そしてときにはきびしく接してくれたひとつ上の瀧上や名越の存在があったことを決して忘れてはならない。今度は佐々木が先輩たちにしてもらったことをひとつ下の中村にしてやることだ。その役割を決して忘れてはならない。

この2日間の熱戦の中、たくさんの選手の涙を何度も見た。標準記録にわずか1cm 足らず、表彰台に立ってもまだ涙が止まらない選手、ラストチャンスをもノにしてやっとの思いで標準記録を突破してこれまた歓喜の涙を流す者…。負けて悔しい気持ちは人一倍あるのに、泣きながらでも優勝したチャンピオンを讃える大きな拍手をする選手。また、人知れず目立たないところで静かに涙をぬぐう者…。『走る、跳ぶ、投げる』の人間の基本的な動きを極めるために、記録と勝負という世界で一番公平で厳正な判定で決着をつけるスポーツ、それが陸上競技である。その陸上競技にとことん向き合って練習することで、見



えてくる世界があるのだ。選手の数だけ、ドラマがあり、感動がある。ともに戦うチームメイトがいて、この大会の成功を陰で支える審判や補助員の動きがある。感謝の気持ちを忘れずに、これからも陸上競技で夢を持ってがんばっていきましょう。『夢』とは、目先の損得勘定なしに、自分の全身全霊を賭けてでもやりとげたい、実現したいと思えることなのである。そんな『夢』を持てることが、本当の幸せであると強く感じている。